

昭和三十四年七月二十三日
第三種郵便物認可
（毎月一回、十五日発行）

（通第一二二号）

慈

光

第十一卷 第四號

目 次

優越感と卑下感について……………	花田正夫…(1)
超人生と即人生(二)……………	近角常観…(4)
求道会館の石の鐘……………	聴聞子…(10)
—— 求道の象徴 ——	
善知識を訪ねて……………	福島政雄…(14)
正信偈私偈(九)……………	白井成允…(18)

優越感と卑下感と信仰問題

花田正夫

敗戦のすぐあと、疎開地から焼土名古屋へ、一台のトラックに家財と家族を乗せて帰る車中で、その時手伝つて貰つた朝鮮の人から

『日本人は明治以来、負けたことがないから、威張つて来たが、これから我々と同じ苦しみを長い間続けねばなるまい。それでも、これで初めて我々の今日までの苦勞も分つてくれ、本当の友達となれるだろう』
と話しかけられた。日本人の持つた優越感のために、日鮮融和、一視同仁、等々の美辭麗句を表に掲げながら、實際は、あさましい生活であつたことを強く省みさせられて慚愧に堪えぬものがあつた。

又、米国の教育視察団の一行が来日の時、当時の文部大臣、阿部能成氏が挨拶されたなかに、次のような意味の言葉があつたと記憶する。

『……不幸にも我国は貴国と戦端をまじえ、遂に惨敗し

て焼土と化した今日、諸氏をお迎えすることはまことに残念なことである。……』

さて諸氏が視察される現在の日本人は、今や敗戦と窮乏と混迷の中で、卑屈の泥沼にあえいでいる。この敗戦国民の持つ卑屈さは伸々洗除し難いもので、それは恰も戦勝国民が持つ優越感の害を除き去ることの至難さに匹敵する。どうか日本の現状のみの視察にとどまらないで、長い伝統と、国民性を、長く広い眼で眺めて、その上で教育の方針を検討せられることを望む……』と。

これも深く印象された。

明治、大正、昭和と、長い間、勝つた／＼で浮調子になり、東亜の盟主、世界の列強とまで思い上つた優越感に酔うていた日本が、今度は、四方八方から叩かれ打たれ砕かれて、卑下感、劣等感のいじけた暗い姿をあらゆる方面に曝露している。

数年前から朝日新聞に東大の先生が「東大生の持つ優越感と卑下感」という題で、二回も、現在の東大の学生心理を發表したことがある。私はこれを読んで、早春にたくましく萌え出る新芽が、すでに蝕まれている痛ましさを覚える。

ともかくも、敗戦すでに満十四年の歳月は流れて、物的復興は非常なものがあるが、日本人全体の心を曇らし、あらゆる方面に支障となつている卑下感、劣等感と、優越感の残夢というものからの解放の道は、未開のまゝである。

或人は言う。日本が立派に復興さえすれば、そういふ暗いいじけた心は洗い去られると。一応はその通りである。然しそこにはすでに優越感の萌芽が出来る。その優越感は元気で明るいけれど、その独善と独断の斧は四辺をまたぐ人々に傷つけ苦しめ、あとに永い恨みをのこし、やがて身から出た錆として自滅するにきまつている。この様に、優越感より生ずる害毒は、卑下感のそれに等しい。

私共は、この優越感の害毒と、卑下感の泥沼を、共に痛切に知らされて只今に及んでいるが、今私共の求めてやまぬのは、再びそれを繰り返して、糞中の穢虫が唇を争うて上になり下になつて、はてしなく蕪濁く亡びへの道でなく、その両者からの解放であり、超越である。

さてそうだとすると、勝つて誇らず、負けて卑屈に陥ちぬ道があるのであろうか。それはこの五分五分の相対の世界には見出すことは出来ないが、ここに絶対無碍の光明によつてその願いが満足せしめられる。

ここを卑下の例で申せば、ランプの部屋と、電灯の部屋があるとす。電灯は明るく、ランプは薄暗い、両者は比べものにならないが、一度太陽の光明が照り輝くと、電灯もその光力を失い、ランプの部屋の薄暗さも消える。そこに同一陽光の明るさのなかに、電灯の誇りも恥じ入り、ランプの薄暗さも心配無用となる。

このことを身を持つて体得された方が法然聖人である。父君が源定明の恨みをうけて殺害せられる臨末に

『父を思うならば、決して仇を討つな。怒みは怒みを繰り返してはてしがない、怒み合う者がひとしくたすけられる大道を得よ』

の遺言があつた。討つて誇り、討たれて恨む、血みどろの修羅の道を開ちて、両頭を切断の道、横超の直道を四十三歳にして弥陀仏の本願に発見せられたのが聖人であつた。かくて善悪の凡夫人を共に懺怒されて、選択の本願念仏を開顕せられたのである。

然し法然聖人は、十五歳の入山より四十三歳まで、あら

ゆる修行をおさめ、一切経説破五回で、しかも、御自身は『我が機すべて及び難く、その智ひるがえつて冥し』で、盲で、癡の身、愚痴の法然、十悪の法然で、方向もわからず白黒も見えず、大絶望の座におちられたのであつた。そこにはからずも善導大師の勸化『一心専念弥陀名号……順彼仏願故』の一句に『余が如き下機の行法は、阿弥陀仏、法蔵因位の昔、かねて定めおかるるをや』と随喜のあまり、高声に叫ばれたのであつた。

我々は今、負けて卑屈におち、なお且或種の人々に對しては優越感を持つて、両者が混頓として渦巻いてゐるので、この心の始末は必ずつけなければならぬことは百も千も承知しながら、我とわが心がどうにもならないのである。丁度、危い線路上に横倒れして身動きも出来ぬ重病病人様である。

ここに親鸞聖人は『仏かねて、しるしめして煩惱具足の凡夫』と仰せられ、更に『我等は、いづれの行にても生死を離るることあるべからざるを憐みたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみ奉る悪人、もとも往生の正因なり』とわが御身にひきかけて、御懇切にお導き下さるのである。

言葉をかえて申せば『煩惱具足の汝としては、勝つては

優越感におち、負けては劣等感に沈む、そこを出たいであらう、超えたいであらうけれど、どうもがいても、一分一厘どうにもならないのだ。その結果は自ずと知れた地獄の苦惱である、誰からもあきれられ、捨てられる。そこを仏は見ることが本願をおこしている。へだてはせぬ、捨てはせぬ。汝の久遠の親ぞ！』と名告り出て下さるのである。

我々は自分が浮ぶよすがの絶えはてていることも気づかず、すつた、もんだ、あいつが、こいつがと、何時までもぐうたらな生活をのんびんたたりと続けている。そこに思ひもかけず本願の招喚を蒙る。この大悲一つで優越感と卑下感の二つから解放せられるのである。この点を近角先生の『超人生と即人生』の御講話から存分に味つて頂きた。先生に導びかれた某婦人が

慕いよる蝶をもたおす毒草に

なおさしそるか天津日の影

と、且つ慚し、且つ喜ばれた信境に、両頭を切断される妙境がひらける有難さがうかがえる。

春結岸の日、稿了。

超 人生 と 即 人生 (二)

近 角 常 觀

五、『悪しくてもよい』では実人生は動かぬ

処が平日聞き慣れて居る人は、ここは思い懸けなきことに思つて居らぬ。故に昨日も婆さんはこれを聞いて喫驚した。婆さんが言うたには『ようもくこんな事思つて居て、大地が割れて墮ちぬと思つて居ましたのに』——そう思つて居る処へ『イヤ我はそれをおとさぬ』これ聞くから如何に墮ちる者も浮び上れるのである。処が婆さんに附いて来た若い人の方は分つて居らぬ。『それは始終聞いている話である、珍らしきことで無い』と、更に喫驚せぬ。私はしまいに言つた。『貴方は駄目ぢや。餘所に行きて御馳走が出ると思つて居る処へ、そら出たと云うようなものだ』と。これでは原則が破れて無い。婆さんの方は、こんな疑う者は逆も駄目ぢや、救われぬ暗いと心で泣いて居る処へ『イヤ我は反対である。人はそれで遁げてしまふかなれども、我はそれが哀れで出て来た仏である。それを悪く

思わぬ、捨てぬ、それで捨てるなら自分が来た詮が無いでないか』と、思いがけなくこれ聞かされるが故、聖人は噫弘誓の強縁は多生にも値い巨く、真実の淨信は億劫にも獲巨し。適々行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ(教行信証 総序文)

これを聞くから如何な疑いも疑いの刃が立たず、如何な隔ても、向うの隔て無き慈悲の為に融かされて仕まうのである。処が若い方の方は『仏は悪しくてもよいと言わぬに決つて居る』と。この聞き方は道樂者の金貰いで『親は愚図々々言うものの、きつと呉れるに決つて居る』と、これになるから有難く無い。故にそういう者には『出て行つてしまえ』泣く泣く出て行く処を呼び止めて『その仕方の無いのが可哀想故見てやろう』これを言わぬ時は初めて親の有難さが分かる。処が大抵の人は親をこの甘いことに眺めて『親が甘いからいかぬ』と、これは『善くなれ

ぬ、く、を言われる人は皆是である。それでは親が何れ丈言うて呉れても、言うて呉れるが、当り前になる。当り前では超世無上ちやうせむじやうで無い。当り前、人が呉れ可きで無い処へ、思いがけ無く下さるのだから超世無上である。故にこゝうなつた日には最早や言葉では分らぬ。實際問題で無くてはいかぬのである。

實際問題では、悪くしては、実際に、可かぬから、皆困る。私などもこれで行き詰つた。その時は、人生と思想とが矛盾して居つた。私は初め何処までも真面目でやると思つて居つたのである。処がそれがひどくなつて『人が自分の真面目を認めてくれぬ』『人が不真面目である』と、人を不足に考へるようになったのであつた。然るに本来の理想は、『人が悪しくても悪しく思わぬのである』『何処までも敵を愛して行くのである。』そう考へて善くして行こうとして居るのに、人に不足が起つて来たのであるから『これはいかぬ。人が認めてくれぬと不足が出るのでは、自分が捨てられてるので無い。自分が人に善く思われたいで仕て居つたからだ。』と。すると然う云う思ひでして居つたを、自分は善くして居るなど、然う云うことを思つて居つたが、自分の傲慢きやうまんであつたと、自分が悪いことになつてしまつた。すると最早自分に温い処などは更に無い、こゝう云う自分の疑い隔てが、これがいかぬと、これから最早何う

く分つて居るも、如何んせん、それは汝の生来なまれつぎで取れぬのである。此方はそこを見てやる』と——『返さないでもよい』と『返せない』とは別である。『返さないでもよい』は、出来るのも横着してしないでもよいになるも、『汝のそれ程努力しても出来ないのだから、そこを見てやる』と、この一言が、急所である。私が光を見たは茲こゝであつた。

私が何とかして止めよう、と何程骨折つても一つとして止まらない。一つ止まれば、あとはいく筈である。何とかして一つこの名譽心さへ捨てたればと、何程思つても、爪の垢程あかぼとも捨たらなかつた。電車道に人がたおれて動けない。動けぬと我も危く人も危く動かうとしても、動き度くも動けぬのである。そこへ『いやそこにたおれて居てもよい』そんなこと言われたかて、誰が電車道に寝て居るものか。如何にせん動きたくも病気で動けぬのである。そこへ一人『あゝあれは病気で動けぬのぢや。』動がぬと慥まこといて了うぞ、は、あれは健康者に言う原則である。末代の智目、行足も潰れてしまつたものは、それでは行けぬ。行けぬと見ると、その行けぬが氣の毒』と、——茲、私が隔てが止まぬは止まぬが生来と見たからは、今迄止まいではいかぬとあつた処を、手の平反して『イヤ止まぬが氣の毒』と、茲に出て来たが他力の味わいである。

しても出られなくなつてしまつたのであつた。

其の時に、私の慈悲は『如何程悪くてもお助けである』と、これを聞いてそこが何うかなれたか。何うもなれぬ『私はよいと言つて下されても、これでは人が呆あまれてしまふ。仏教ではよいとなるかも知らぬが、これでは人がいかにぬ』と、この時は、仏のお慈悲ということが『悪しくてもよい』と、しか聞けて居なかつたのである。

処が悪くしてはいかぬから煩悶して居る。悪しくてもよい位なら煩悶しやせぬのである。縱令人はよいと言つてくられても、自分がいかぬから苦しんで居るのである。

処が縦來これまでの他方聞く人が大抵、ここを『悪しくてもよい』、『返さなくてもよい』の意味に聞いている。それでは平日は或は通れるかも知れぬも、弥々死んで出かける時とか、或は眞の人生に打ちつけた時は、それでは通れぬ。今の婆さんなども、それに聞いて居つたから『向うがよい』と言つて下されても、こんな疑いが起るようでは『妄念妄執の心の起るをも止めよ』というにもあらずで、よいといつて下さるかも知れぬも、こんな思いが出るようでは信仰でなからう』と、これで安心されなかつたのである。

六 言つて欲しい一言。

すると此の時、こゝう言つて欲しい『それは汝も不足を止めよう、隔てを取らうと、一生懸命苦心して居ることはよ

処が私などは茲まで言われてもなおどまづいた。それは一念は有難いの思い、と、こゝう思ひ込んで居る。それにそれ程までも言われても喜べぬのは矢張り可かぬと、根が五分五分で出来て居る人間故、何処までも之が附いて来る。元来仏を喜ぶことを、仏はお慈悲な人ということと相對的に思つて居るのである。故に『これ迄に言われても有難いとならぬは、よく、可かぬ』と、これが思えてならぬのである。よく『あれ程懇篤こんとくに説いて下されて、この上無からうと思つのに、それが聞けぬのだからいかぬ』と言われる人がある。あれが矢張り私なる者に対し五分々々になつて居るのである。それ程に聞いても思えぬのが氣の毒と言つてこそあれ、これ程に言つたから有難く思えといふ如き慈悲が何処にあらう。それ程に言われても思えぬのが氣の毒故、その何時までもし、よく言つて居るのにそれに何処までも呆れぬのだと言われるのである。茲になるともう優しい言葉で言われて居ては分らぬ。『あれ程に友人が言つて呉れるのに、有難いと一言頭が下つたら、友人も甲斐があつたと喜ぼうに、これが一言言えぬのだから如何な友人も呆れるだらう』と、最後にこゝへ出て動けぬのである。最後に友人の方は『君、誰がそれに呆れると言いましたか。それだから君の心の冷え切つたのが氣の毒と言つて居るのである。その言えぬのが君の性分なのだから、君の方

はどうなると其の性分で勝手にやつて居り給え。此方はその冷たいのを何処までも捨て、は置かぬのだから」と、茲、向うから突き放して貰わねば分らぬのである。

そこで人生これ程のかけ離れた、慈悲の実現、ということが無くば救われる期は無いのである。この世は斯く何処までも五濁の凡愚の人生、五分五分の泥ばかしの冷たき胸の中に、『直に來れ、我能く汝を護らん』とは、その冷たきに何処までも呆れぬ慈悲の実現である。これ無くばこの世が救われるということは無いのである。

己上は我々の心の冷たさで申したのであるが、仏教は主として生死問題で説くは、現に親が子に別れねばならぬ、この仕方の無き人生、その仕方の無きを何処までも見て下さる、この慈悲の実現ありてこそ、その者が撰取さるるのである。

撰取とはこの慈悲の為に、この五分五分の奴が救われて、人間の方を離れて、お慈悲の方に撰取られたが撰取である。撰取不捨とはこの隔ての私に、お慈悲の方が斯く何処までも隔て給わず、その隔てぬ御真実の為に、終に此方が恐れ入り『有難い』と、この浅間しき心の中に、この広大のお心が入り満ち、届いて下されたが一念の信である。その一念に、思わず南無阿弥陀仏の一言が出るは、人

為に安心された処で、初めて分るのである。

又同じ話になるけれども、全体人間が他力が見えぬ迄に自分の心で『あゝこう』苦しむ真面目と、他力が分つて成る程我慢であつたと分ると、同じことのように大違いである。それは、例の岩本さんが、申訳が無いと自刃されなければならなかつた考は、道徳上、常識上、はた武士道の上よりも真面目と言わなければならぬ。処がその死ぬより、——呑死んでも仕ようのないのを、何処までも気の毒と見て呉る友人があり、それを飽くまでも救おうと言うて呉るとなつた時は、一方は『借りたものなら死んでも自分で返す』という我慢の真面目であるに對して、一方は『そうした処で返されないのを何処までも引き受けよう』という友人の同情である。その間には非常な距離がある。そこをこれ迄の人は『俺が返すからお前は返さなくてもよい』の言い方で、ちつとひどいけれども『あの友人が返して呉れるから、自分はしなくてもよい』の聞き方になつている。それでは真面目の人は満足せぬ。それなら北浜銀行式で、出来ぬ時はどんなことをやりても仕方が無いになる。

処が一方は『自分が済まぬのであるから、自分が返さなくてはいかぬ』——これは甚だ真面目であるも、それが返し得ぬのである。青年の人は、何処までも『自分が返せ

生斯く互に、人間五分五分の綱を引き合い、互に相手に仕合つて苦しんで居る処へ、今斯く広大の慈悲を聞くもの故、その慈悲の為に、人間五分々々の綱を横に截れ、お慈悲の方に救い取られてしまつたのだから、思わず南無阿弥陀仏の一言が出る。即ちそれが『即横超絶五惡趣』である。茲まで皆さまがこれまで、この截られてしまふ処を頂いて居られたか、どうであらう。

七 機の深信は宗教的自覚なり

斯くここまで人間の風雪を哀れみて下さる温きストーブに遇えば、親鸞聖人が日野左衛門の門前におけるが如く、如何に冷やされても、日野左衛門に不足が起らぬ。然ういふ若干の業深き親鸞を、その深きが哀れとの御真実の温かさよと、——前生の業といふことも、茲で言えるのである。『イヤ、俺は正しいのである。俺は正しいのにあんな奴に出遭つたのが業』と、それでは業が人になりてしまつて可かぬ。茲は真宗信者の人が、人生問題の上で自分の惡しさに気がついて来る処の大問題である。

も一つ言えば、人間は我慢な者で自分が悪いとは何んなことありても言わぬ。常に言う如く罪惡觀というは、自分が行き詰りて悪いと分るのでは無い。悪いとはこの恵みのる、善く出来る』の方に目を着ける。けれどもそれが、いつまでも返されず、よく出来ぬに行き詰るのである。するとそれを仏の方より『それは汝、何程思うてもそれが出来ぬのであるぞ』と——即ちこれが聞えたが機の深信である。罪惡觀である。故に機の深信は自分で出来ぬが分りて無い。此方は何処までも出来る／＼と言うて居るのを、仏の方より『それは汝出来る／＼と思うのだけれども、それが出来ぬのであるぞ』と、この一言は仏よりとどめを刺されるのである。——『そういう上は、そのしよのないのを何処までも引受けるぞ、それをいかぬと言うのでは無いぞ、何処までもそれに呆れぬのぞ』との仰せなのである。

この『呆れぬぞ』も言葉で間違ひ易い。『呆れぬぞ』は、お慈悲の深き言である。此方が冷やかなれば『あんな奴は』と遁げて仕まうは慈悲で無いも『それに呆れぬぞ』が慈悲である。何処までも呆れさせられぬ慈悲なれば、終に如何なる冷やかな此方もその冷やかの方が打ち敗かされ、恐入り、とうどその慈悲に包みとられて『成る程有難や、自分で出来る自分ではなかつた』と。『我身は現に是れ罪惡生死の凡夫云々』の機の深信は、それ程までに呆れさせられぬお慈悲に救い取られた処で出て来る言葉なのであ

る。

故に『直に來れ』は、此方が『喜んでから』、『疑い晴れてから』に非ず、喜べず、善く出來ず——而も此方は何処までも出來る積りで居るのを『それが出來るので無いぞ、その出來ぬのを引受くるぞ』と、この直きく／＼の御真実であることを仏より直きく／＼言われ、その仰せに夜が明けて『成る程、出來るので無かつた悪るかつた』は、斯くお慈悲に此方の『出來ぬ』が融けて仕まつた処で出て來る自覺である。斯く『直に來れ』のお言葉の下に、直に夜を明けさせて貰えば『それが自分で出來るのでは無つた。出來ぬ自分を引き受けんと御慈悲一つが有難い』と、それが『獲信見敬大慶喜。即横超絶五惡趣。(正信偈)』の味わいである。

八 即 人 生

さて妙なところに即の字が來た。即ち即、人生の味わいである。それは我々が五惡趣を超絶するは、死にしないでない。如何なる人生の寒きも、それに打ち勝ち温める慈悲の火に遇えば、その風雪の人生に居て安心させて貰える、人生を離れて安心するので無い。その如く、このお慈悲の火に温まれば、この寒き人生に居て、直に温かく生活させて貰える。それが即人生の味わいである。故に一度人生を超

ば、その自分が何処までもお見捨て無き超人生の恵みによりて安心し、その恵みの故に、その者が安心して即人生の生活がさせて貰えるとなるのである。

なお即人生のことも一つ言い換えると、聖人は即、往生、便往生のことを言うて居られる。『愚禿鈔』には又二種の往生あり。一には即往生。二には便往生(中略)即往生とは斯れ即ち難思議往生、真の報土なり。便往生

絶した超、人生の味わいが無ければ、即人生の味わいは來ぬ

此の間も五六年前より私が九州に行く毎に聞きに來られた或人——その人は種々の困難を潜りて、喜びに入られた人であるが、昨年末に死なれた。日記が遺つてあつて、喜びが書いてある。主人がそれを見られて大吃驚せられ、私に聞きたいとのことであつた。私はハツキリした記憶が無かつたので、写真を持つて來て貰つて見るとよく分つた。日記を見ると実に著しき安心である。処がその人か死ぬ前の言葉が『あゝ死にたくない——それは漸く幸福の時機に入つて、死なねばならぬのであるから。また『わたしは死ぬと、残つたみんなが氣の毒ですな』と——これは『死にたく無い』は本當の言葉である。今まで苦心して仕上げただけ、よけ死に度くない。然るに死なねばならぬを仏かねて知らし召し、その仕方の無きを何処までもお見捨て無き慈悲に救われて、その者が參らせて貰うのである。それだけの安心があればこそ、自分の行く先に不安に思うことは無けれども、さて自分が居ないと『あとの人』が皆不幸ですな』と、この一言は如何にも自信のある——親も夫も兄弟も、残らずを一身に引受けた自信ある一言と、思ふのである。又實際それが出來得るのである。然るにそうありながら、その自分が死んで往かねばならぬ人生なれ

とは即ち是れ諸機各別の業因、果上の土也。胎宮・辺地、懈慢界、雙樹林下往生なり。亦難思議往生也と知るべし。即ち便も『すなわち』と読む。うち便往生は眞実の恵みが頂けたでない。即ち方便化土の往生が便往生である。即往生はこの世にありながら、眞実の恵みに夜があけて、一念に超絶する。即ちこの世に即しつゝ直に超人生の生活を得させて貰う処の味わいである。

己 上。

求 道 会 館 の 石 の 鐘

—— 求道の象徴 ——

昭和三四年二月

聴

聞

子

殿堂である。

近角常觀師をわれわれは「おおせんせい」(大先生)とおよびした。本郷(いま文京区)森川町の求道会館は、飢えたるわれわれのためにこんりゅう(建立)された知恵の

會館に鐘がある。分厚い一枚の自然石でできている。その音は遠く鳴りわたる底のものではないが、昔よ石にもし

みとおれ、とばかりに、ガン！と打ち込まれ、石はまた片律のひびきもにがすまいと、吸いとるばかりの構えである。

「これでもか／＼これでもか／＼」と力一杯に打ち込まれたお慈悲のツチに対して、これはまた、聞けども聞けども徹底することのできないしぶとさである。「石の鐘」こそよくも物語っているのである。

そして「おお先生」のいまさぬ今日、混乱と悩みに直面して、わが肉となり、心のかてとなるものは、耳底にのこるこの鐘の音——「おお先生の法語」である。

① 「信仰をえる」ということ (大正一四年)

ホトケが、信仰という別のものを、くれるのではない。ほんのうごく(煩惱具足)を同情し、どこどこまでも見守つて、捨てたまわぬことに、気づいたことをいうのである。

② 平和の源泉 (同)

○「和ヲモツテ貴シトナス。忤ロウ(考えが互に相反する)ロトナキヲ宗(本源・一番尊いもの)トナス。人ミナ党アリ、

リ、マタ達スル者スクナシ」(聖徳太子・十七憲法)。「達スル」とは、党派心をやめ、達観(全体を広く観察)することである。

△ われわれの善Ⅱ人を相手としての善である。人に認められたいためのである。人にむくいられなければ不足という善である。

△ 自分という自覚Ⅱ自分が人によくしている。すなわち、自分が人を救っている、と思つている間は、「救い」ということはわからない。

△ われわれの愛Ⅱ親の愛があるために子供を親にたよらせることになる。たよつてもらつても、死んで行く子供を救うことはできないのである。

△ 自分が悪いという自覚Ⅱ自分は人によくするが、人がそれほど思つてくれないのだから、人が悪いのだ、という気持になる。しかし一歩進んで、「人が悪い」と思う「その自分の心が悪いのだ」、となつて来なければならぬのである。

△ 悪夫の妻の立場Ⅱ 悪い夫と一緒に暮さねばならぬようになつたのは、前世の業報(原因があつての結果)だから仕方がない、という考えは、まだ充分でない。もし夫が悪くても自分がよくするといふためにはどこどこでも、よい事をして行かなければならない道理である。

△ 主義・主張Ⅱ 今日の色々の主義といつたものは、その目的は、みな、平和を求めようとするのであるが、大体は、「自分はよくしているが人が悪いのだ」、と言つているにすぎない。しかし実をいうと、「人が悪い」という「その自分の心がすでに悪いのだ」とわからなくてはならないのである。

○ 宗教Ⅱ 「別れた人に会えるように」といつて宗教を信じるのではない。さようなものは、自分の思うことのためにする、変な宗教である。愛する人に離れている者が、いかにして安心するか、というのが宗教なのである。

◎ 入信の経路Ⅱ 「へだて心」をやめて安心するのではない。へだて心が止まらずに困つているわが身に對して、「止まぬのは無理ない、もつともだ」といつて、止まぬ心(業)を買い込んでくれるホトケの思いやりに、気がつくことなのである。

△ 理想は高かるべしⅡ 理想が高くないと、自分の理想がくだけた(「自分はダメだ」とは思わないであろうから)。

△ 「敵を愛せよ」とはⅡ 「敵を愛す」という人は、人を愛することに価値を認めるから、自分が神の地位、高い位に上つてしまい、他人をかえつて悪く思つているのである。真に敵を愛するならば、相手が「悪かつた」と頭の下るまで、自分の愛をやりとおさなくてはならない。だが、相手は決して「悪くかつた」などと言つて、ではない。それもそのはず、こちらも実際は、良くしているのではないからである。

○ 死んで生きるⅡ 仏教の思想では、ひとつ、つらいことがある。それは一度、行きつまつて自分はダメだ、凡夫だつた、となることである。しかし、凡夫なればこそ、それ以上のものに生きかえるのである。

さつき夜や死んで生まるゝ子は仏ほとけ 蘇村ぶそむら

○ 解放された気分Ⅱ 行きつまつた自分を、「もつともだ」「かわいそうだ」と見てくれる人があがれば、著しい心をもつて解放されるであろう。

○ 「永劫(ながいながい)の修業」Ⅱ どこどこでも同情して良くして下さること。

△ 世の罪みなわが罪 Ⅱ 人のツミ、世界のツミというも
みな、わがツミ。

○ 同情して下さる Ⅱ 同情とは、普通ならば、「凡夫は
いかんぞ」といつて、捨ててしまふところを、「それは
ムリない、かわいそうだ」と同情するのであるから、ど
こまでも、こちらの足りないところを補ない、どこどこ
までも一緒に、またどこどこでも力になつて下さるこ
となのである。

△ 慈悲と物質 Ⅱ 慈悲の「こころ」のあらわれが「物」
である。カネをもらうのではなく、心をもらうのだ。心
はカネにも命にもなつてくれる。恵みは浄土ともなり、
ホトケの姿ともなつてくれる。

○ 流転りんね Ⅱ 過去世、未來世を論じるまでもなく、
あちらへ行つてもへだて、こちらへ行つても争い、五分
五分の生活をして、やむ時のないわれわれである。だか
ら親鸞聖人は「一切ノ群生海（衆生が生存している迷
いの世界）、無始ヨリコノカタ（因果がめぐりめぐるこ
の世の中）ナイシ今日今時ニ至ルマデ、穢悪汗染（罪惡
だけがれ煩惱でよごれている）ニシテ清淨ノ心ナシ、

△ 平和を得るの道 Ⅱ 自分の心では、争いの心ばかり
で、平和は出ない。お慈悲の源で救われて、はじめて、

善 智 識 を 訪 ね て

これから今度は、この文殊菩薩が出かけるのでありま
す。出掛けるところに何時もは文殊師利菩薩とか云つてあ
りますのに、ここでは文殊師利童子、童子とは少年と云う
意味であります。文殊師利童子と書いてありますことは意
味の深いところであるかと思つてあります。と云います
のは、善財童子が文殊に会つて求道の志を起すというこ
になるのでありますが、善財童子は少年か青年か、兔に
角、若いのであります。その善財童子の導きをする文殊菩
薩の姿が童子の姿をもつてして現れている。ここが非常に
大事なことというように前から思つて居ります。つまり
童子になつて、童子を導くのである。

それで、文殊童子が善住楼閣を出て行くのでありま

虚仮詔偽（うそいつわり）ニシテ真実ノ心ナシ（信巻
本）とある。

○ 「念仏申サント思イタツ心ノオコルトキ」（歎異
抄）Ⅱ どこどこでも退けず、見すてぬ人の心に会つ
てみれば、こちらから「有りがとうございます」と頭が
さがる。そこで「ナムアマダブツ」と称名（口にアミ
ダブツのミヨウゴウをとなえること）がでる。

△ 残る二つのもの Ⅱ 自分の悪い心と、ホトケのあた
たかい心。

○ 仏の所在 Ⅱ ホトケをば、ホトケの広大なお心でみ
める。本願（仏菩薩が衆生を救済しようとして起
す誓いの願ひ）でみとめる。「お心」は聴いて気がつ
く。「救いおおせざばホトケとならず」というホトケの
あわれみの徹底力によつて知るのである。

△ 峠（とうげ）Ⅱ 「これではいかんいかん」で山を登
る。それを、どこどこまでも、あわれんで下さる。お慈
悲で安心して山を下る。下るときには、逆境にいても、
「これほどまで、あわれんで下さるお慈悲か」と、はげ
まされるのである。

平和にさせていただくのである。

福 島 政 雄

す。出て行くのに諸々の神々に守られて出て行きます。そ
うすると、舍利弗も文殊に従つて一緒にこの南の方に行く
のであります。

この南の方に、と云うのは意味があるのでありますよ
う。南の方へ、南の方へと、これから後の善財童子の求道
の歷程というものが、南へ南へ南へとなつて行くのであり
ます。これは何もこの印度の地理から考えんでもよいこと
でありましようけれど、印度という国が南へ／＼と行くこ
と海へ行くのでありますからして、そういうことから考えま
しても、明るい南の方へという方に志して、大海を目指し
て行くと、こう云う風に考えてもよいかも知れませんが、
兔に角、南へ／＼と行くのであります。

そうするとそこに福城の入道が来るのであります。文殊菩薩がその沙羅林、これは又釈尊の御入滅の沙羅双樹という、あの沙羅の木の子林であります。その林の中の大きな塔、大きな廟所がそこにある。そこに文殊菩薩がおいでになるのであります。

そうでありますから祇園林を出て、沙羅林に来たとなりますと、仏陀の入滅のところ、釈尊が涅槃に入りたもうたその場所に場面が變つていふことになります。

そこに文殊菩薩が来て居られるといふことを聞いて、福城の人が、城から出て、その文殊菩薩のところへお参りに来るのであります。

その参りに来る人々の中には、俗人の男子、俗人の女子、俗人と云つても信仰を求める男子女子そう云う人も沢山来ますし、その中に、童子があつて、それが善財といふ名前の童子であつて、その童子が、眷属五百人と一緒にそこに来る。そこにまた少年ばかりでなく童女達も沢山やつて来るのであります。

そうすると、文殊菩薩は、この福城の人々が集つて来たといふことを知つて、不思議の力をもつて、自在身を現わすのでありますからして、自由自在の姿を其処に現わしたといふことのであります。

一体善財童子と云うのはどうしてそう云う名がついたの

ここで一寸本文から離れますけれども、奈良の東大寺にあります、華嚴五十五処絵巻、絵の巻物があります。五十五処でありますけれど、何か悪い人間がその一部分を切つて盗んだらしいので、今残つてゐるのは三十五処であります。その絵巻といふのが、善財求道の要処々々を次から次へと善知識を訪ねて行く肝腎な場面を絵に書いて、その上に一寸讀のようなものを書いてあるのであります。これはもと／＼中国、シナの宋の時代の仏国禪師といふ方が『文殊指南図讚』といふものを書かれた。それも私は近角常観先生をお訪ねした時、先生がこんなものがあると言われてそれを拝見したことがあります、それがもとだそうであります。その仏国禪師の『文殊指南図讚』をもとにして、今のは日本で画かれたものであります。華嚴五十五処絵巻であります。これの複製したものを私も持つて居ましたが、どなたに差し上げましたか、今頃持ちませんが、それを見ますと仲々面白いのであります。

ことに初めのところが面白い、善財童子が初めて文殊菩薩に会う、そのところが非常に考えさせられます。といふのは今申し述べました通りに、沙羅林の中の大きな廟所のあるところで、そこで会うのであります。ところが沙羅林と申しますと、今云います様に、仏陀の入滅の地であります。そしてその絵巻の一番のところを見ますと云う

かと云えば、この童子が初めて母親の胎内にその生命が始つた時であります。受胎の時であります。その家の中に、自然に七宝をもつて飾られた樓閣が現われた。そして善財童子は母親の胎内に十ヶ月居て誕生をしたが、その姿形が非常に正しい、すつかり手も足もよくとのうてゐる。そしてこの善財が生れた時にはこの家の一切の蔵にみんな宝物が満ち充ちたとあります。サア、ここはどう考えたいかとあります。一切の蔵に宝物が満ち充ちた。然し善財童子といふその名前は、善をもつて宝とするといふ意味であります。その宝物といふのは金銀財宝といふのは、善をもつて宝とするといふ子供が其処に生れて、そこに非常に嬉しい光が、世の中の嬉しい光が射し初めたとも云う有様であります。

文殊菩薩はそのことをよく承知してゐるのでありますからして、非常によく喜んで、文殊はここで微笑するのであります。ほゝえむといふのは非常に大事な心持の現われますところでありまして、何とも言えない、微妙な心持が、その微笑の間に、文殊菩薩から善財童子に感ぜられる。善財童子が文殊菩薩の心持を、文殊の微笑の中に感ずるわけであります。そして善財童子のために一切の佛法を説いたと云うのであります。

と、その大塔廟がもう荒れはてた壊れたような有様に画かれてあります。そのところで善財童子が文殊菩薩に会つてゐる。これはどう云うことであらうと。

お経を見ますといふと沢山の人が集つて来ている。その中に善財童子が雑つていた。それを文殊が眼をつけたとなつてゐる。そして善財童子の姿といものは淋しそうな姿である。そして文殊の前に坐つてゐる、これはどう云うことであらうと。

然しそれが非常に面白い。これは確か佐々木先生からもうかがつた様に思ふのであります。善財の心持がそこに現われてゐる。善財童子としてはたとえ千万人の間に居つて一緒に文殊菩薩の前に坐つていても、自分はたつた一人と云う心持なのであります。つまり一緒に其処に集つてゐる外の人達が、今は自分の心の問題に何か直接のかかわりがないといふ様なことで、つまり自分一人で居るといふ心持である。

これはこのみんなそうでありませう、真剣になつて道を求めて、一人の道を行くのであります。そしてその仏様の廟所が壊れてゐる。所は沙羅林であると云うことは、仏陀はすでにこの世を去りまして遠い。自分の心を導いて下さるはずの仏陀といふものはすでに死し去り給う。死んで了つておいでになる。沙羅の林は唯この淋しい風が

吹いて居るばかりである。その心持が善財童子にある。この心持が絵巻にこう画き現わしてあると、こう考えて参りますと、非常に面白いと申しては何であります、非常に意味が深いと思つてあります。

廟所（まうら）が飾りたてたものが画いてなくて、壊れたものが画いてある。「仏はすでにこの世にまします。誰か自分さまことの道に導いて下さる方があらうか」と。

けれども、そこに、一体善財がそう云う志を起しているのは何処から起すようになったのかと、それは文珠の光と申しましても仏様の智慧の光であります。仏陀の智慧のひかりが、この童子の生命の底を照しているのであります。そこに善財童子のこの求道の心というものがおこつて来る。この道はたつた一人で行くところの道である自分を真実に導いて下さる仏様は無いのであらうかというような、そう云う心持は、いづくんぞ知らん、仏の智慧のひかりに照らされたところから発起（おこ）つて居るのである。それだから善財童子をして求道の第一歩に踏み出さしむるものは、文珠をおして仏の力である。然もその求道の第一歩に踏み出そうとする善財童子の心は非常に淋しい。何故淋しいかと云えば、自分のような奴を誰か導いて下さる方があらうか。仏はすでに過去の人であつて、今この世にましますか。ではないか。自分の前途はどうなるであらうかと云う淋し

い心持が善財の心にみなぎつて居る。それを華嚴五十五廻絵巻の一番初めにあらわしてあると思つと、この絵巻というものは意味が深い、あんな風に現わしてあるところにも云えないものがある、味わいが深いと、こう云うことを私は佐々木先生から聞いたらしいのでありますけれど、私自身としても感じの深いのであります。未完

三河八橋 鈴木橋村

閻浮有縁 （えんぶう） みな哭きつれて涅槃変

白毫の面輪悲しき寝釈迦かな

舞う蝶も側仕えして涅槃変

それぞれの今朝の別れの春の旅

凍大地温み来野鳥低く飛ぶ

蘆戸（しよこ）にひしめく顔や 御水取

くれないの実をくみ合わせ花御堂

正 信 偈 私 解 (九)

序記。親鸞聖人の生涯。

白 井 成 允

揃

親鸞夢記に記されたる観音菩薩の告命四句の偈文は、恐らく祖聖に於いて結婚の意義の解決となられたものである。その文の初めに行者（ぎやうじや）という。仏法を修行する者として之を読めば、行者は即ち出家して僧となり道を修める、則ち己れの身を愛慾の縁から遠ざけ、ひたすらに心身を清浄ならしめて、愛欲に乱れ汚れる世界を浄化する任を帯びる者でなければならぬ。その限り僧が妻をもとめることなく、家を離れ、塵巷（じんこう）を避け、山林精舎に住みて、行を修める伝統に貴い意義がある。愛欲名利の煩惱に乱されぬ道が現実存在することは、それだけで既に、其の如き煩惱に乱されて苦しむ世間の依処（えしよ）となり、安息処となり、これを救う力を蔵するからである。然るにわれらの祖聖は此の伝統に背いて敢て妻をめとり、山林の精舎を去り

て世間の塵巷に入りたもうた。インド・シナ・日本の三國に互れる仏教教団の伝統に背いて、此の破戒墮落（はかいだらく）を敢てしたもうたのは何故であらうか。是れもとより他の別業（べつごう）を超える事である。ただ私は私なりに、象を撫でる群盲のひとしての臆測（おくそく）のべることを許されたい。

かの偈の初句に云う、行者宿報設女犯。修行僧が女犯する、この破戒に墮ちる事は宿業の果報として避け得ざる事である。此の句に現われる宿報という思想——寧ろ覚知は祖聖の生涯を貫いて深く流れている思想である。其は原始仏教に於ける三世に互る業因果の教から伝わり来り、日本仏教の主流をなす本覚大乘の空門（くうもん）に在りながらなお生命を保ち、行者をして徒（いたずら）に超越空の妄想の中に飛躍することなく、能くおごそかに現実道德の境を省みしめる思想で

ある。然し宿報として女犯するという決意の中に何が意味せられるか。

此の間に答えようとする私にはどうしても、次の事共が思われる。

先づ祖聖の性格に於いて著しい事として、ただひたすらに真実を求める一筋道を歩み、決して虚偽に止まり得なかつた事が想われる。其の最も宜い例として、かの善導大師の「不得外現賢善精進之相内懷虚偽」の句を読み交えられた事を挙げ得よう。「外に賢善精進の相を現わしながら、内に虚偽を懐いてはいけぬ」是れ聖僧善導の自誠の語であられたであろう。外に現われる言行ばかりでなく、寧ろ胸内に動く意の中にも、決して虚偽が混じつてはならない。内外透徹して清淨無垢なるべし、という此の聖僧の自誠は、これを聞くだけで既にすがすがしい思いがする。こんな清い願を立てて生涯を生ぎぬいた人がいたのだと想うと、人類という者の崇高をおぼえて心も嬉しくなる。それで大師の伝を尋ねると、「眼を挙げて女人を見ず」と記されてある。大師にとつても女人を見ることは内は戒を破る縁となるを恐れたものであろうか。或は又同時に、その相対する女人の心を惑わす縁を供するを恐れたものであろうか。この行持と、彼の自誠の語を相照らし窺うて、私は道徳的理想主義の絶頂に立つ聖僧の姿をおもひ浮

ければどうして宿報にまかせ得よう。歎異鈔に「よきこともあしきことも業報にまかせて、ひとえに本願をたのみまいらす」と言い、また「本願を信ぜんには……悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまざまの悪なきゆえに」と言う。和讃にも、

「本願力にあいぬれば　むなくすぐるひとぞなき

功徳の宝海みちみちて　煩惱の濁水へだてなし」

と言へるように、本願の念仏にあいまつるところ罪業の宿報も必ず転じて、功徳の大海を成すの縁たらしめられる。此の信の一道に於いて愛欲の宿報が浄化せられて妙好の花を開かしめる。是れ本願力の自然に由る。

この故に、宿報として女犯せざるを得ざる行者に対して「我成玉女身被犯云々」の声がかなたから聞こえてくる。その三句の義を味うに、是れ六角堂の救世菩薩の誓願として、玉女の身を現わし、行者に添いて善美をならしめ、命終れば引き導きて極樂界に生まれしめるであろうことを告げる。即ち行者をして、今生には正定聚の位に入ることを得、来生には滅度を証するを得しめるよう助けることこそ、念仏の行者のために現われ来たる女性の意義である。

上に掲げた如く(去年十二月号)、親鸞夢記によれば、祖聖は夢に六角堂の救世観世音菩薩からこの四句の偈文を告げられたもうたばかりでなく、更に「此の文は吾が誓願な

かべる。

ところが祖聖はこの句を「外に賢善精進の相を現わすことを得ざれ、内に虚偽を懐けばなり」と読み交えられた。いくら厳しく努めても胸の内に虚偽の湧くのを禁め得ない、それは禁めようと努めれば努める程、いよいよ烈しく湧いてくる。これを内に隠しておいて外に賢善精進の相を現わす。是れ虚偽を累ね罪業を積むものに他ならない。ひたすら真実を欣ぶ魂にとつて、この如き虚偽に止まることはできない。祖聖が善導大師の教を仰ぐこと深くあらせられながら、而も大師の深き自誠の語を此の如く読み交えたもうたのは、大師の自誠を、文字に依らず精神に依りて、御身に受けたもうたのである。而も此の受け方がそのまま進むところ、眼をあげて女人を見ざる大師の行持から転じて、女人をめとる祖聖の生活が始まつたのである。其は内に愛欲を懐ける身なるが故に、その愛欲を覆い隠して、外に賢善精進の相を現わすという虚偽に止まるを得ず、むしろ素直に愛欲という宿報にまかせた生活が始まつたのだと云い得よう。

然し素直に宿報にまかせるためには、まかせた心の奥にその宿報がたと如何にあさましいものであつても、必ず其処で、そのあさましさが転ぜられ、汚垢が浄められてゆくような道が信ぜられていなければならぬ。この信がなかり。一切群生に説き聞かす可し」と告げられ、斯の告命に因りて数千万の有情に之を聞かしむと覺えて夢がさめたと記されてある。

之に因りて私に想う。此の如き夢を結ばれた源に、当時の祖聖には僧侶の出家不犯の戒律について深き疑惑があり思惟が重ねられたのであるまいか。先ず痛ましい事実として、たと外なる行儀には此の戒律を守つていても、内なる心情では、どうしても之を犯さざるを得ないという厳しい反省があられたのではなからうか。たと善導大師の如く眼を挙げて女人を見ざる外儀を保つても、女人に心牽かざる心情の動揺を覚えざるを得ない。内に虚偽を懐く事実を盡い隠して、外に賢善精進の相を現わすことこそ、祖聖の厭いたもうた所であるのを想うとき、私は、僧侶として持つべき此の戒律と、人間の感性的本能との背反について、祖聖が如何に痛ましく悩ましまししかを想わざるを得ない。

もとより人間の生まれつきの性格として、女人に心牽かれるというようなことがさほど問題にならない人々もあるに違いない。道元禪師を想うと、月輪の山上に澄むが如く、清風の竹葉を渡るが如く、如何にも清々しい気持になる。カントを読むと、性慾について記しながら、其は曾つて彼自らの問題でなかつたかのようにある。ひたすらに

禪定に遊び、或は哲學的思推に耽るところに、人生の最高の樂地を味いて、其処に安らい得た賢哲の境は仰ぐべく敬うべきである。

けれども其は私共凡愚の住まい得る境ではない。私共の住む境は余りに厳しく愛欲名利の煩惱に縛られている。而も私共は其の繫縛に於いて魂の不自由を感じ、どうかして其れから脱れて自由になりたいと冀う。此の如く煩惱に縛られて、其から脱れたいと冀う者にとりて祖聖親鸞のあらわれはありがたい救いの道である。祖聖は私共に同じて愛欲名利の繫縛の悩みの中から、其が転じて覺道を歩むの縁とならしめられる無碍の道を現わし示したもつたからである。而して是れ此の四句の偈文が単に夢に善信に告げられたというに止まらず、更にこれを一切群生に説き聞かすべしと命ぜられたという所以の意義であると思われる。

僧といふ俗といふも、本来二道あるのではない。人生の究竟の意義は、唯是れ、煩惱に背いて、法界の真理を知らず、自ら迷い他を害いつつ三世にさすらう此の罪業の身をして、自ら覺り他を覺らしめつつ相共に覺道を歩むの身たらしめるの一事に存する。この一事、是れ菩提を証する一大事である。是れ苟くも人間に生を受けたる者の根源の問題である。今、救世菩薩の告命は、求道者善信をして、愛欲という最も根深い而も殊に僧にとつて極めて敵しい煩

悩に即して、之を転じて覺道を証せしむるの端を啓いたものである。而して是れはもとより既に弥陀仏の大悲の願にめざめて念仏したまう、その念仏者の心の中に示現せられたことであり、念仏の徳の自然のはたらきと謂うべきものであらう。

此の如き夢に端を啓いた救世菩薩の誓願は、後の日に於いていみじくも華さいた。則ち祖聖と令室惠信尼との相敬愛したまう事実が之を証する。上の夢記は祖聖が令室を迎えたまう時のおん心を語る。即ち、己れの愛欲を懲れみ、之を転じて弥陀の悲願を証し、念仏往生の道を明らかならしめんがために女身を以て現われたまえる救世菩薩として、祖聖は惠信尼を待ちたまうた。然るに惠信尼は亦同じく祖聖を觀世音菩薩の化現として敬いかしずきたもつた。このことは惠信尼消息に於いて周ねく知られている事であるから、今これに其の文を掲げること略する。(私には、惠信尼消息の原文に充ち満てる素純な真実心を私共の言葉に移し出す力が無い。これはくりかえし、このたどたどしい原文を読み味わうより他に致し方の無い文である。)

覺如上人は御伝抄に於いて、此の夢想の記を掲げたる後に、「傳 此の記録を披て彼夢想を案するに、ひとえに真宗繁昌の奇瑞、念仏弘興の表事也」と云つておられる。日

御寄贈図書紹介

十七条憲法講讀

定價、百八十円、送料二十円。 白井成允 著

慈光の旅

井上善右衛門 著
信仰と反省

定價、二百円 送料三十円

聖徳太子の生涯と思想

金治 勇 著
定價、二百五十円 送料四十円

人生に思う

佐々木徹真 著
定價、百五十円。送料二十円。 振替、京都二五七八八番

以上の書の発行所。京都市下京区堀川通花屋町、百華苑

御廻向

加茂 仰順 著
定價、三百五十円。送料三十円。 振替、京都九三六番

発行所、京都市下京区花屋町西洞院。永田文昌堂。

晩年の親鸞

福島政雄 著
定價、百二十円 送料二十円。 振替、京都九三六番
発行所、永田文昌堂

本民族の歴史の上に実現せられてきた事実である。猶上人は続いて「然者聖人、後の時に仰せられて云く、仏教昔西天より興りて、経論いま東土に伝わる。是れ偏に上宮太子の広徳、山よりも高く、海よりも深し。……儲君もし厚恩をほどこしたまわずば、凡愚いかでか弘誓にあうことを得ん。救世菩薩は即ち儲君の本地なれば、垂迹興法の願をあらわさんために本地の尊容を示すところなり。……」

と云い、更に祖師聖人が、法然聖人を勢至の化身、聖徳太子を觀音の垂迹と仰ぎたまひ、「この故にわれ二菩薩の引導に順じて如来の本願をひろむるにあり……」と言いたまえるを伝えておられるが、私は、これらの文により、その他広く祖聖が太子を仰ぎ慕いたまひしことの深きを憶うときに、此の六角堂の觀音菩薩の示現、告命の奥に、聖徳太子の御家庭の面影が、祖聖の御心眼に映りてあられしにあらざるかを想わざるを得ないのである。

但し祖聖が惠信尼を迎えたもつたのは、越後に於いてであらうし、其以前京に在しし日、既に妻子を持ちたまつたという説を私は肯うことができない。

(三月一日小庵にて)

編集後記

△ 仏降誕の聖月、花の四月が参りました。天地を指される誕生仏の微笑の姿は、生きになやむ人々の心に大きなひかりとよろこびを伝えられることでありましよう。それを六道を越えた七歩のところに光輝を放たれて居り、六道流転の我等に燈炬となつて下さるのであります。

○ △ 「超人生と即人生」の近角先生の御講話は、これで終ります。前月号と併せて御身願います。微に入り細にわたつての御懇切な導きを仰ぎ、謝すべき言葉もありません。

△ 超人生、あつて初めて、各々そのところを得しめられる非僧非俗の即人生の白道がひらけることであります。

△ 「求道会館の石の鐘」とは、聴聞子御自身の巧みな難い象徴の言葉であります。私共も亦、石の鐘の言葉であり、よき人々の慈悲心から、力一杯打ちこまれた実語、金言が、平素は心の内面に洗ながら、お聞したことを忘れたが内から浮び出て下さる、いきたまことばとして現われて下さる。

このことは不懐の宝を恵まれたよろこびであります。そうして妙宝を繰り返し、嘗味させて頂いた鍛冶屋のように、聞き叩き水にひたす純化され、私共の附加した雑夾物が除去されて、純無垢の金言が歴々とあらわれて来るものがありましよう。こうして純化された法の言葉は、また私共も繰り返して大切に頂きましょう。

○ △ 福島先生の御講話は、いよいよ文珠菩薩に導かれて永遠の求道の旅に出る善財童子の心持をお話し下さいました。まことに智目、行足を欠く末代の凡愚の私共には、求道の心さえおこし得ないのであります。真信尼のよく繰返した金句「目もない耳もない、手もない足もない、焼けばたまたよな私を」と、如来廻向の大悲を随喜して居ります姿も思ひ併せられます。唯々仏智不思議の御はからい一つであります。

△ 白井先生の正信偈御講話は、寒中御風邪やら、御大病後の御疲れやら、しばらく頂けませんでしたが、今回、二回分を次々とお恵送頂き、今た、陽春と共に御恢復の事をよろこび申上げます。今回は、親鸞聖人の御結婚生活についての深い御教を頂き、結したの真髓をお聞き下さつたもので、日本

ると仰ぎ、聖人ましまさずば、日本仏教は如何になつたであらうか……とさえ思われましよう。
△ 橋樑と卑下は、私自身の心に渦巻いて居る無始以来の濁流であり、ことに敗戦後は卑下感が強く、優越感も心底には動いて居ります。この時、両頭を切断の白道を無碍光仏のひかり願わくば、再び戦前の優越感に逆転することなく、法然聖人の御身を培してお導き下さる、まよいの打ちどめ、恩怨の彼方のひかりをここに感佩申すこととであります。

○ 毎月の日曜例会、廿四日の法話会は続けます。御来会下さい。聚墨生

定価	一部	二十円(送共)
	半年	百二十円(送共)
	一年	二百四十円(送共)
編集・発行人	花田 正夫	
印刷人	本田 政雄	
発行所	慈光社	
振替口座	名古屋一〇四七〇番	